

アイボメックトピカルが黒毛和種肥育牛の初期増体に及ぼす効果

紙 屋 茂

目 的

入来牧場では周年放牧により子牛を生産・育成し、これらの牛を肥育試験に供している。放牧生産牛からは外部吸血寄生虫及び内部寄生虫が検出され、食欲低下、体力低下及び疾病が発生しやすく、これらのことが発育低下の一要因であると考えられている。

本試験では、外部吸血性寄生虫（ダニ等）及び内部寄生虫（乳頭糞線虫等）の駆除剤として牛用に開発されたアイボメックトピカル（放線菌生産誘導体、シオノギ製薬）を黒毛和種肥育牛及び放牧生産子牛の吸乳期と離乳期に投与し、増体に及ぼす影響を検討した。

材料と方法

試験1 入来牧場産黒毛和種雌牛16頭を用い、生時体重、離乳時体重及び肥育開始体重の測定後に肥育試験を開始した。試験は肥育牛舎内で行い、試験区分は試験区と対照区とした。試験区では雌牛8頭に対して1997年12月にアイボメックトピカルを25cc/頭、1998年6月に45cc/頭を牛体に塗布した。対照区は雌牛8頭を用い、無塗布で試験区と同時に肥育試験を開始した。肥育試験は土着菌を用いた発酵床上で行った。試験期間は、1997年12月1日～1998年12月8日の間とした。

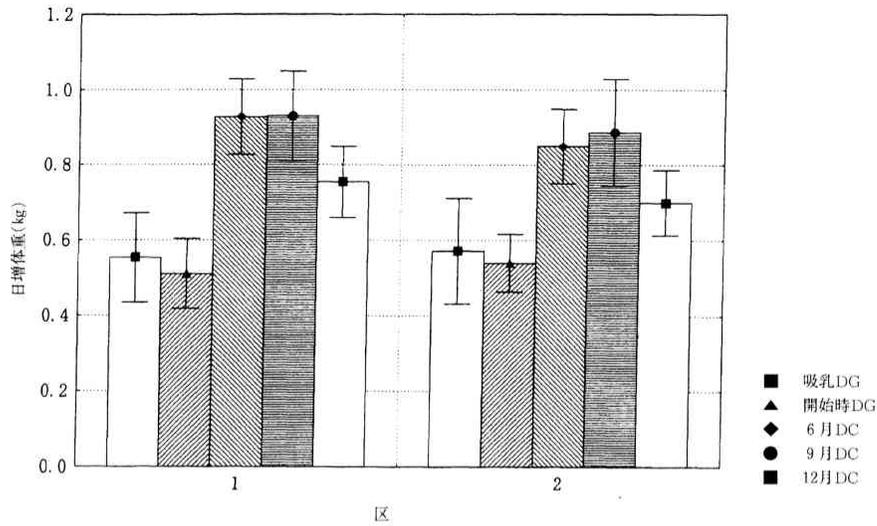
試験2 放牧生産子牛の吸乳期及び放牧育成期の間で行い、試験区には雄7頭及び雌1頭を用い、生後7日目にアイボメックトピカルを5cc/頭塗布、更に離乳時（平均88日齢）に10cc/頭を塗布した。対照区には雄7頭及び雌1頭を用い、無塗布し他の飼養管理は試験区と同様な方法で行った。体重測定は分娩時、塗布時及び離乳時に行った。分娩後からサツマゲイト内導のまでは分娩牧区でその後はげっとゲイト内で飼育した。試験期間は1998年2月10日～1998年8月3日の間とした。

結果と考察

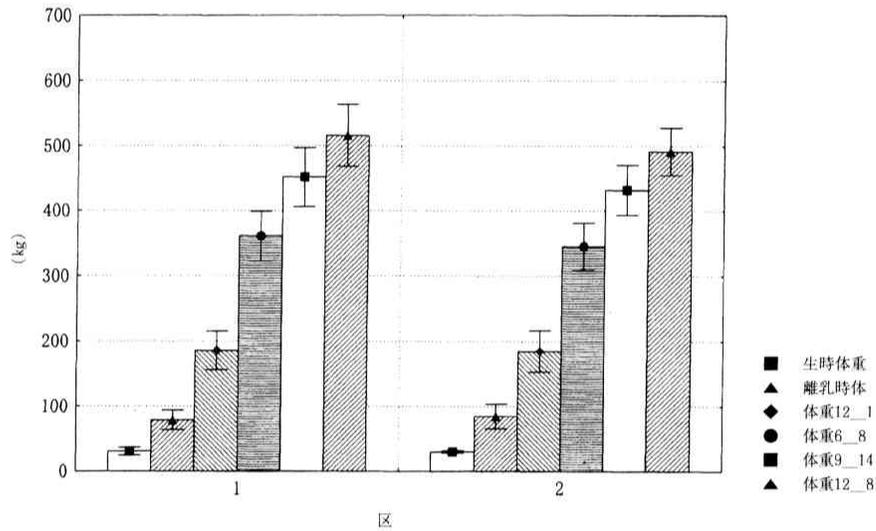
試験1 開始時の日増体量は対照区がやや高い値を示したが、6月、9月及び12月での日増体量が試験区が高く推移し、アイボメックトピカルの日増体量に対する効果が認められた（第1図）。体重では、肥育開始時には差がなかったが、6月、9月及び12月での体重は試験区が重く推移し、体重に対するアイボメックトピカルの効果が認められた（第2図）。

試験2 放牧生産子牛の分娩直後からゲイト内導入時までの日増体量は試験区が高い値（649g）を示した。しかし、離乳までの日増体量及び放牧時の日増体量にはアイボメックトピカルの塗付効果は認められなかった（第3図）。

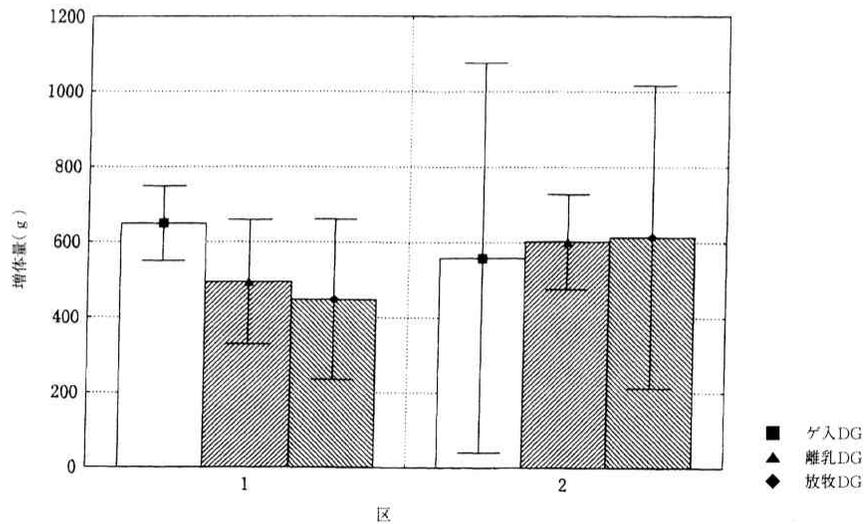
以上のことから肥育前期においてはアイボメックトピカルの塗付効果が認められたが、放牧生産子牛の吸乳期から放牧育成期での効果は認められなかったため、更にこの点について検討する必要があると考えられた。



第1図 周年放牧生産黒毛和種肥育牛へのアイボメクトピカル塗布効果



第2図 黒毛和種肥育牛のアイボメクトピカル塗布効果 (体重)



第3図 放牧生産子牛の吸乳期・放牧育成期でのアイボメクトピカル塗布効果